



仔馬の思い出

多田 鉄雄

東京の神田で育つた私が、来年は小学校へあがると云う年齢の幼稚園の夏休みのことであつた。祖母に連れられて生れて初めてその郷里の田舎に行き、そこで数週間をおくつたのであるが、見るもの聞くもの珍らしいことばかりであつた。今にして思えば、至つて平凡な農村にすぎないのであるが、青々と伸びた稲田に跣足で入つてメダカやドジョウを追つたり、ふいに涼しさを覚える山道を小走りしながら蟬を取つたり、凡ては都会では全く経験できないことであつた。けれども一番私の心を索きつけたのは、あぜ路を親馬に寄り添いながら歩いて行く仔馬の姿であつた。その仔馬は一寸道草を食つては、又あわてて親馬のそばへ馳けよつたりしていた。近所の小父さんが、その前に野良の婦りに働き終つた自分の馬に私をのせてくれたことがあり、馬に乗る楽しさを始めて

而も強く味わつたことが一層馬への愛着を深めさせたのかも知れない。

どこにもよくある通り、田舎の子供達の方は、又子供達の方で、例えば「オラ」を「ボク」と云い、「ニシ」を「キミ」と云う私が珍らしかつたらしく、いわば私はいつも沢山の子供達の取巻をしたがえたお山の大将のようなものであつた。その子供達と田舎の家の縁先で、何をしていたのか、それは全く記憶がないが、ともかく遊んでいた時のことである。前にも来て顔見知りになつていた話好きの、けれども名前は知らない小父さんが、「坊ちゃん、いつも元気だなあ」と云いながら私のわきに腰をおろしたが、いつ東京へ帰るのかと聞かれるまゝに、もう一週間で、と答えると、それでは何かいゝものをお土産にあげたいが、田舎で何がほしい。と云うのであつた。私は「ほんとは仔馬がほしいんだけど」とそれでも、そんなものをもらつてはすまない気がしたし又くれるとも思えなかつたので、遠慮しながらこう云うと、「いゝとも、丁度自分のとこに二た月前に生れた仔馬がいるから、くれてやる。坊ちゃんならもう乗れるよ」と答え、東京へ帰つたら、こうこうして育てるのだと、色々親切に教えてくれ、それでは明日とりにおいで、道をこうこう行くと、そこに広い庭があるが、その樹に

仔馬をつないでおくから、自分が居なくても連れて行つてよい、と云うことであつた。との話にすつかり夢中になつた私は、それでも子供なりに、ほんとにかくの知ら、もしそうだつたらなんと親切な人だろうと思つたりしたが、その晩になつても、翌朝目がさめても、その仔馬を飼う夢で一杯であつた。あの神田の街を仔馬に乗つて走るのだと思うと、もう居ても立つてもいられないほどであつた。約束どうり案内役を買つてくれた子供達がさそいで来た。私たちは歩くのもまだるこいような思いで教えられた道を進んで行つた。たしかに、その広い庭の中ごろの樹に愛らしい仔馬がつかねだ。仔馬は始めのうち、一寸恐れているようであつたが、前に教えられていた通り、首を軽く撫でてやつたりしている裡に、私にも慣れて来たようである。そして私がいよいよ手綱を樹からほどいて引出そうとした途端、「誰だ馬をいたづらするの」と叫びながら一人の小父さんが遠くから近付いて来た。昨日の小父さんではない。聞かれて色々とわけを話しているうちに、私は昨日の小父さんにかつがれていたことがわかつて来た。けれどもその小父さんのことを憎む気も、恨む気も、何故か起らなくて、たゞ夢の破れた悲しさだけが胸一杯にひろがつて、ぐつと泣くのをこら

えていても、涙が次々に流れ出て、眼の前がかすんで行くのであつた。すぐごと帰り道で、でも未練もあつて子供達に「それでもあそこが昨日の小父さんの家ぢやないの？」とたづねたりした。子供達はだがよく知らなかつた。

この仔馬の出来事はいまでも時折私の思い出に蘇つて来る。大人の心ない冗談が幼い心をどんなに痛めつけることがあるかの教訓をこれから読み取るのである。それにも拘らず、仔馬がもらえたと云う期待のこの夢が、あの当時と少しも交らずに私の心のどこかに残つていて、ふと懐しく、そして何か喜びに以た胸のときめきを覚えさせるのである。その一方、今でも私が何か期待とか希望とかが破れて幻滅を感じる時、あの当時の悲しみにそれが翻け合い、妙に心をあたたくしてくれ、おのづと慰められるのである。

幼児の心理、教育を思い、そして幼児の空想とか想像を、どのように育てて行くべきか、又現実の世界へ事実の世界へどのようにして導いて行つたらよいかを考えるとき、私はいつもこの仔馬の夢の尊さを思い浮べ、このような夢がどんなに大切なものかを思い返すのである。